

沖縄系アメリカ人のライフ・ヒストリー(Ⅱ)

鳥 越 皓 之

本稿はハワイでの沖縄移民のライフ・ヒストリーを対象にしている。ただ、その続編である。そのため、社会学におけるライフ・ヒストリーについて、どう私が考えているかということ、および調査の経過については、あらためて述べない。以下に記述してあることは、ライフ・ヒストリー研究からみれば「資料」ではないと私は考えている。しかし社会学の「常識」では「資料」とみなすのが妥当であろう。本稿をどのようなもの（論文、研究ノート、資料、その他）と判断するかは、しばらくのあいだ読者にまかせておきたい。

※

琉球士族

——永山盛光

1

永山盛光はかれの生涯において、ひとつの避難所をもつことができた。かれはハワイ諸島のひとつ、カウアイ島マカベリ耕地を出奔し、ホノルルでの生活をはじめた。それは1912（明治45）年のことである。ホノルルでは運よく医者の下働きの職をえた。かれの働く灰田医院は、長じて歌手になる灰田勝彦の父の経営するものであったが、それはともかく、かれはこの医院で働き盛りの20歳代後半から40歳代までをすごすことになる。

この失業の危険性のない、そして収入のややよい職業を、私は避難所とよんでみた。この避難所にいたおかげで、永山盛光は他の移民に比べて、平坦な道を歩むことになる。

それゆえ、貧困の悲劇、それにともなう家族の悲劇はすくなくった。また、大きな困難がしばしば要求するところの、自分の生涯の意味についての鋭い問もしなくてすんだ。しかし永山は、沖縄移民のなかではめずらしく、琉球士族の出身であ

った。琉球国の首都、首里に育った都会人であった。そこで琉球士族の末裔としてのプライドが、ヤマトンチュウ（大和人——本土の日本人）によるウチナンチュウ（沖縄人）蔑視にたいして、微妙な対応をとることになる。

宮城太郎は、標準日本語の発音では、ミヤギ・タロウである。しかし^{ヤマトンチュウ}大和人が^{ウチナンチュウ}沖縄人にたいして、おでこに皺をよせて、ナグスクのターラーと沖縄発音でかれをよべば、それは悪意に満ちた差別である。この種の差別は日常のさりげない日々のなかにひろがっている。当時、ハワイに移民した多数の「学問」のない沖縄農民が対抗した論理は、つぎのような表現にあらわれている。

「沖縄、沖縄とバカにするな、天皇陛下はただ一つぞ！」

日本移民について造詣の深いハワイ島ヒロ市在の日本移民研究家、大久保清氏は、このような表現にたいし、「天皇陛下をだすしか能がなかったのですナ」とわれわれにコメントしてくれた。たしかに沖縄人のこれは、危険な論理だ。まがりなりにも沖縄は、1879（明治12）年までは独立国家であった。この論理、つまり天皇陛下の赤子として、みな平等であるという論理は、琉球国家を合併（吸収）した側の大和人が沖縄人に示した論理ではなかったか。この論理を沖縄人が大和人に投げ返したことになったが、つまりこれは投げ返しただけであって、本当に同じ天皇陛下の下にいと信じていたかどうか危ぶまれる。くだって第二次大戦のさなか、日本人にたいするハワイ当局の取り調べにたいし、ミー・ノット・ジャパニーズ、ミー・オキナワ！（Me not Japanese, me Okinawan）と叫んで危機をのがれようとした沖縄人がいたことは事実だ。

私はここで、たいへんな微妙なことをいおうとしている。私がいおうとしているのは、もちろん

沖縄人は信用できない、ということではない。私がいおうとしているのは、沖縄には沖縄固有の歴史があり、沖縄移民はその固有の歴史を背おってハワイに登場したということだ。それは大和人も同じであった。そしてその相互の固有の歴史をもった者たちの出会いが、「差別」という形で具現化したことは悲劇だ。

私は本稿の冒頭にしては不釣合いに長く差別のことを述べてしまった。私たちはいま、差別をする側の人たちを逆に軽蔑するだけの余裕をもっているが、当時のハワイ沖縄人は、この種の差別のなかで生きなければならず、それがかれらの日常生活のなかに地下水脈のように流れていたことだけは記憶に止めておいてほしい。

永山盛光は記憶力のよい人である。かれの話してくれたハワイでの生活史は、沖縄移民のひとつの典型を示しているように私にはおもえた。プランテーションでの生活、ホノルルでの生活はどのようなものであったかを、かれの経験を通じて知ることになろう。

2

1908(明治41)年、日本帝国特命全権大使の高平小五郎と、米国务務長官エリヒ・U・ルート(E. U. Root)とのあいだで、いわゆる「細土協定」が結ばれた。この協定によって、移民は「自由移民」から「呼び寄せ移民」に変わる。これ以降、ハワイ在留の家族などの呼び寄せによる以外、一般人はハワイへの移住が不可能になった。世にいう「呼び寄せ時代」である。

この協定は日本側の自発的な移民自粛という形式をとったが、実際はサンフランシスコにおける日本人学童隔離問題や、ハワイ在留日本人のアメリカ大陸渡航禁止事件というような日本人排斥の動きをふまえての「自粛」であった。

さらに1924(大正13)年に排日移民法案がアメリカ合衆国議会を通過する。これによって、日本人移民は全面的に禁止された。すなわち、この年以降は、日本人一世が生じなくなったのである。

* この「細土協定」を成立させるための大きな圧力となったのは、1905(明治38)年3月1日のカルフォルニア州議会の決議であった。その決議理由の主要な内容は以下のごとくである。

① 日本人労働者の移住は人種的習慣、その生活の方法、気風および一般的性質上、わが人口に望ましからざるものを増加することを意味する。かれらはアメリカ市民に同化せず、アメリカ人たらんことを希望せず、また共和制度にたいする尊敬の念なく、あくまで日本人として存在し、ただその帰国の時期のみを待望する。

② 日本人労働者は、すでにカリフォルニア州における各種産業に勢力を有し、賃金低廉なる理由により、ますます労働区域を拡大し、白人労働者の職業をうばっている。それがためカリフォルニア州の白人労働者は、遠からずしてその生活を支持するに足る労働賃金保持の機会を失う悲運に落ちいらんとしている。

③ 日本人労働者は、その居住地の公共事業にたいし、その収益を分つこと全然なく、たんなる仮寓者にすぎない。かれらはカリフォルニア州の発達になんら貢献することなきのみならず、かえってその繁栄を阻害し、安寧をおびやかすものである。

(外務省移住局第一課『移民九十年』1958年)

永山盛光の家は小さな家である。みどり色のペンキ塗りの家で、そのペンキがかなり剥げ落っている。ホノルル市の東洋系の人たちの多い住宅街に位置する。

盛光は小がらで、やや猫背である。高齢になると東洋人でもこうなるのだろうか、盛光の瞳は黒というよりも、もっと薄くなっていて、私にはブルーがかって見える。かれは薄茶色のやや長めの半ズボンをはいている。長めといっても、くるぶしがみえ、やせているためであろう、その丸いくるぶしがひととき目立つ。半ズボンにたいへん長い皮ベルトを巻いている。一重半よりやや長めというところか。使いふるした皮ベルトである。いまかれは90歳である。

——1924(大正13)年いうたら、もうわしは結婚して子供もできておった。(それ以降は一世がないから)、だから、いまごろはもう一世はおらんようになって、すくのうなって。わしは一世です。1928(昭和3)年に、一世で首里市人会というものを設てたんです。それがいま[1979年]では、市人にはお父さん時代の人はおらんようになってしもうて、二世が継いで、首里クラブという名前になつとるんです。ここ生まれの人には

首里市人会というよりか、首里クラブという方がわかりやすいんでしょうね。それが、首里というてもなんですよ、婿とり嫁とりしてですね、首里人ばっかりじゃないんですよ。大和人とも一緒に^{ヤマトンチュ}なる、田舎ンチュとも一緒になる。それでいまでは(首里クラブの構成員は)300人ほどいます。もう首里人と首里人とが夫婦になった者はすくないですよ。はじめは首里だけで80なんん人がおったんです。

あのころ、(沖縄の)田舎の人たちがハワイに來たもんで、首里の人はすくなかったですよ。なぜかという、あのころのハワイは出稼ぎとして行ったんです。3年くらい働いたらもどろという気持ですよ。そのころ首里のくらしは悪い方じゃなかった。だが田舎はイモをつくって食べておった。

首里は田舎よりはくらしはよかった。……しかしまあ、田舎は土地をもっている。それなのに首里は、廃藩置県になって、しだいしだいになんにもないようになっていった。首里ではみんな家禄をもっていて、それで毎年毎年食べとった。廃藩置県で家禄がなくな^{トシチ}って、どうして食べるかという問題になって殿内という(家柄の)家もほとんどつぶれてしもうて、その下の士族[下級士族]なんかも田舎へ下りていった。それをチュジュウと沖縄語でいいます。「居住」のことです。チュジュウになって畑を耕したりしたのです。

わしが生まれたのは、廃藩置県のちょうど10年あとです。廃藩置県は明治12年、わしは明治22年の生まれだから。……もう、廃藩置県になってから100年になる*。

* 永山が廃藩置県から100年になる、といったこの感慨は、本土の廃藩置県の感慨とは根本的に異なる。沖縄における廃藩置県の実施は、琉球国の滅亡を意味している。この廃藩置県がおこなわれた明治12年でもって、第1尚氏以来、数百年にわたって尚王家ににぎられていた統治権は、日本国の明治政府に移った。明治12年にいたるまでの明治政府のとった琉球政策は俗に「琉球処分」とよばれている。琉球国滅びて100年になる、ということである。

わしの家は御^ウ殿。御殿いうたら尚家[琉球国王家]から分れたもの[いわゆる王族の一族]。それで、勉強したものは、いまでいう下院議員とか上院議

員になるんです。

わしのお父さんは、わしの子どものときには畑を耕したり、店で働いたりしていました。まあ、生活はゆっくり[そんなに苦しくない]であつたんでしょうね。それでも自然自然に苦しくなってきたわけですよ。それでわしは、もう沖縄ではなんだから、ハワイでも行った方がいいだろうとおもった。そのときなんかも、首里からハワイへ行ったものはあまりおらんですよ。

そのころ沖縄では当山さん*の下働きがだいぶおって。そして、ハワイはいいところだ、とわしらにいておった。ハワイには仕事がたくさんあると。沖縄ではあのとき、あんたもう、1日畑やって[1日の畑での手間賃]2銭。いまの値うちでいえば、まあ2ドルぐらいです。2ドルもないです。1ドルぐらいですね。2銭。沖縄では品物が安いから、それでも立っていくんです。そのころハワイに働きに来て、3年働いたら千ドルぐらいもうかるという話でした。千ドルくらい。あのときドルは日本円のちょうど倍であつたから、日本円で2千円になる。2千円あつたら、沖縄ではなにもかもして、ゆっくりできる。

* 当山久三は明治中期の沖縄の代表的な民権運動家である。のち、沖縄の人口・食糧問題の解決をめざして、移民運動に熱意をそそいだ。「沖縄の海外移民は民権運動の一つの副産物であつた」(湧川清栄『時代の先駆者当山久三』布哇タイムス社、1953年)という指摘は、この民権運動家、当山らの活躍をさしでのことばである。当山らの運動により、明治32(1899)年12月5日、沖縄県最初のハワイ移民30名が沖縄を出発している。当時の沖縄人のハワイのイメージはつぎのようなものであつたという。「布^ハ哇が太平洋のどこにあるかも判然としなかつた当時の沖縄人に取って、それは大きな冒険であつた。沖縄と布哇とでは昼と夜とも転倒して、沖縄が昼の時は布哇では夜、布哇で夜の時は沖縄は昼だそうだと聞かされただけで、当時の人々には身の毛の^ハ立^ハつ恐怖心を起させたのである」(湧川、前掲書)。

それでみんなは、3年のうちに千ドルもうけて帰るという気持だ。ここで永住する気持じゃないんですよ。それでまた、沖縄の親はどうかというと、儲けてはよう金を送れ、ていうんですね。沖縄の親の方は、ハワイに子供を行かせて、それであれが儲けてくるから、自分らは安^{あん}気だいうて

ですね、そういう気持でおるんですよ。

ところが本当は千ドルも溜らない。沖縄における親は子の送ってくるのを待っている。それで、こっちは自分が生活をしながら沖縄に金を送ることになるでしょう？ それでわしも、働いた金を毎月毎月国へ送ったもんですよ。沖縄のお父さんはその送った金を使って、働いて儲けておるとおもったら、そうじゃない。送った金で生活をして、もうないようになってる。

ハワイに来て、沖縄の人なんかは、あのときはホノルルでは仕事はないですよ。キビ畑〔プランテーションの耕地〕でも、この島〔ホノルルのあるオアフ島〕にはもう（日本）移民が入り込んで、もう仕事はないからいうて、わしらはカウアイ島に渡ったんですよ。カウアイ島では移民がおらんからいうて、カウアイ島のマカベリ耕地からホノルルに移民募集が来ておったんですよ。それでホノルルから、わしら10人、またこまい舟に乗ってカウアイ島に渡ったわけですよ。

3

カウアイ島のマカベリ耕地で、あのとき1日に10時間働いて、26日〔1か月〕で18ドル。ことに首里人^{シュリンチュ}なんかは、畑の仕事をやってこなかったから、なかなか26日全部は出られなかったですよ。食べるのは1か月に6ドル払えば、三食が食べられた。大コックというて、まあ今のレストランみたいなものです〔独身者を相手にして、朝夕の食事と昼の弁当をつくる仕事。主として主婦が従事した〕。独身者はふつうは大コックにたのみました。そうしたら、朝起きて、もうちゃんと飯を炊いておるんだから。ごはんを食べて、汁を飲んでですね、弁当はもうちゃんとつくってあるから、それを持って行きます。弁当箱とそれとビール・ビンですね、それにお茶を入れて一緒に持って行くんです。弁当箱は、椀もおかずを入れるのも入っている。それにフタをして、それで袋に入れるんです。袋にはちゃんとしもをつけてですね、ちゃんとしもがありますよ。弁当は日本食。おかずはイリコなんかですね。あるいはタクアン二切れとか三切れとか。あるいは魚、このくらいの大きさのアジであつたら半分に切って。半分こう入れてです

ね、まあ、そうごちそうじゃないですよ。

これは1か月に6ドルもかかるので、自分でする人もおります。自分ら友だち3〜4人が集まって、家の前にこうまい家をつくって、そこにカマドをつくるんです。ごはんを炊いて、おつゆをわかして、ソウメンなんか買って、またおかずをつくったりなんかしてね。弁当も自分でつくって、それから仕事に行くのよ。そうすると食べ物1か月に4円か5円〔ドル〕ですますことができる。こういう自分で食事をつくるのを手ゴックといいます。

毎月毎月あたりまえに18ドルずつもろうてですね、辛抱して国に送るんですね。わしなんかは毎月10ドルくらい送りよったです。でも、毎月、よう送らんですよ。自分も食^{しょく}せにやならんでしょう。それで田舎の人のように毎月毎月10ドルはようきんですよ。わしがお父さんに送っても、あっちは使つとるんだから。あっちもないようになる。こっちもない。たまりやせんですよ。こっちはあんた、帰る運賃もないんだから。あそこ船運賃が35ドル。……もう帰れんですよ。

朝6時から仕事をやって、11時半までやって、それから30分で昼食を食べる。また12時から4時半まで、全部で10時間働きます。夜に汽車なんかに乗って家にもどってきて、風呂に入って、夕食を食べて、寝ます。こういう働いて寝て、働いて寝てです。

わしがカウアイ島マカベリに上ったときは、沖^{ウチ}縄^{ナンチュ}人は150人くらいおったです。150人くらいおったが、結婚して奥さんがおる人は6人か7人しかおらん。ほとんど全部が独身もんよ。女がすくないもんだから、いよいよ男女関係が乱れてですね、まあいろいろあるですよ、どうしても。そのころ、結婚するのはみんな写真結婚ですよ。写真を送って日本から女をよぶんですよ。ここに女がいるんじゃないだもの。人の女を盗んだり、二人がひっついて別の耕地に逃げたり。みつかったら、二人がくっついて元に帰らないので、本人がダメなら金を払えといった金銭問題もありました、当時は。

永山盛光がいたマカベリ耕地は大きな耕地で、ミール・キャンプと1から10までのふつうのキャ

ンプがあった。キャンプに住んでいた人たちの書き残した書類をみていると、「キャンプ」にたいして「館府」という漢字をあてているのを知るが、日本人のイメージでは集落や部落に近いものである。マカベリ耕地ではひとつのキャンプに平均30～40の家があったという。ただ、キビの加工工場であるミールの横にあるミール・キャンプは通常他のキャンプよりも大きい。そこはいわば耕地の中心となる。このキャンプには畑で働くふつうの労働者以外に、当然のことながら、ミールで働くミールメンが住んでいる。また通常は、このミール・キャンプからすこし離れて、オフィスで働く人びとやルナなどのややハイクラスの人たちの住宅地がある。マカベリ耕地も大きなミール・キャンプをもっていた。

——キャンプの家は寝間もあるし、便所もある。ただ、便所は外にあるんですよ。夫婦者は一部屋もらえるが、独身者は3人も4人も5人も一緒に入るんです。ただ寝るだけだから。キャンプは仕事に行き、帰って寝るだけのところ。手紙をだすときは、町からいろいろなものを売りに店の人がキャンプに来るので、その人にたのむんです。

子供ができると、女は仕事に行かれますよ。それで、独身者の洗濯をやったり、あるいはミシンをやるわけね。まあ、辛抱人もいますよ。上手な者は店から10ガロン^{テン}入りの大きなワインを買って、1ガロンとか半ガロンとか小売して、ちょっと儲けたり。頭のいいやつはこういうふうなこまかい仕事をやったりですね、あるいはまた、薬屋から薬を買って、薬をまた売って歩いたりですね、そういう商売っ気のある人もあったね。また仕事が終わってからや、土曜や日曜に散髪屋さんをするのもあった。こんな辛抱人はだいぶおるんですよ。そうしてお金を残して、ワイメア [Waimea] の町へ行って、頼母子を起こして、500ドルとかなんとかの頼母子をとって店をはじめたりなんかするんですよ*。このような辛抱人もおるし、またバクチメンもおりますよ。まあ、辛抱人の方が稀れです。

* 当時の日系移民のあいだでは、頼母子はかなりきかんだったようである。ハワイでふつうにおこなわれていた頼母子の方法はつぎのようなものである。たとえば、頼母子を起こす人を「親」とよぶが、その親が100ドルを必要とすると、自分以外に9人のな

かまをあつめる。この10人がおのおの毎月10ドルずつ支払うことにして、最初の月は親が100ドルを受けとる。次回からは入札制になり、たとえばAさんが各人に利子として2ドルずつ支払うということでAさんに落札されると、Aさんはまだ落札していない8人の人に2ドルずつを支払う。すなわちAさんは、100ドルから16ドル差し引いた84ドルを手に入れることになる。毎月このような落札をくりかえし、全員が落札した時点で頼母子の集まりは解散する。

ハワイではこの集まりは、ふつう休日である日曜日にひらかれるが、プランテーション(耕地)では、月に1度の給料日の数日後におこなわれたという。また教育のある者、ハワイ生まれの者は頼母子に関心を示さなくなったと1930年代の雑誌では報告されている(Ruth N. Masuda, *The Japanese "Tanomoshi", Social Process in Hawaii*, Vol. 3, 1937.)。

辛抱して、また辛抱して大きな店を持った男がおりますよ、沖縄の男で。ワイパフ [Waipahu オアフ島] にアラカワ・ストアーという大きなデパートがある。そのアラカワ・ストアーは、はじめワイパフでこまい店をやって、それから太うなって、いまじゃアラカワ・ストアーいうたら、大儲けのデパートになっているんですよ。こういうふう成功する者もおりますしな。いまはお父さん [アラカワ・ストアーをつくった当人] は亡くなって、お母さんは元気だが、子供がなん人もいて、ずっとやって [経営して] おるね。

こんな辛抱人もおるし、また遊び人もおりますね。ただわしら首里人は学校を出てきたから、ホノルルでの仕事 [事務的な仕事] はできるが、田舎から来たのは学校は出てねえが、畑やっとするからね。(それで首里人は畑作業が苦手だ。) それでも畑の仕事はできるが (いちばんの問題は)、ことばがイカンもんだから [沖縄人は日本語がしゃべれないから]、 「オキナワ、オキナワ」いうてから、バカにされてですね。もう来て直^{じき}はどこのキャンプでも、沖縄の人と内地の人とグループが違うようなかっこうです。まあ第二世からは同じ学校を出て、同じようにやってるので、そんなことはないだろうけど。第一世はだいぶんバカにされたもんですよ。ことばがわからんから。ことばがわかったら、あたりまえにいつて、あたりまえにやるんだから。なんでもないですがね。もうことばがわからんで、みなバカにされとりますよ。

4

明治40(1907)年にハワイに来て、3年間マカベリで働いて。それから、もう畑の仕事はわしらの体じゃいかん、いうて、カウアイ島のケカハ〔Kekaha〕に移った。そこのシュガーミール製造場、砂糖製造場ですね、そこで働いたです。そこで働くと2ドル多いんですよ。月に20ドルもらう。そのかわり、あこのの製造場は12時間働きですよ。5時から5時までの交替で。1週間は夜、1週間は昼というふうに働く。夜^{よるひる}昼ずうっと、機械を休ませませんよ。

機械で汁をしぼるんですよ。しぼったカスはカラカラになっとるんですね。そして、裏からこう回って釜のところに落ちるようになっていて、それを燃やしてしまう。釜で燃やして、その釜の蒸気の力でもってミシン〔機械〕をまわしよる。汁の方はあっち行き、こっち行きしてですね、荒砂糖が袋に入って出てくるんです。うっかりすると、機械だから事故がおこる。手をはさむとかなんとか。わしがおったときにも、砂糖の汁をわかすタンクに落ちて、大ヤケドをしたのがいました。沸きよるんですからな、砂糖の汁が。まあ着物を着て靴もなにもかもはいたままタンクに落ちて、それで病院に入院してね、まあ元気になったですね。

それでまあ自分も、いつまでもプランテーションにおいてもそれだけのことだから、ホノルルに出た方がよいとおもって。ホノルルに出たのが1912(明治45)年。明治天皇が亡くなられた年ですね、その年にホノルルに来た。ホノルルでは、なんですよ、沖縄人には事業家というものがおらんのですよ。それであっちこっちの金持ちの家へ行って、やとわれ仕事をさがして。……それでもみつからなくて。ただ、パイナップルの時季がきたら、ホノルルでも3か月だけは仕事があるんですよ。そこで1時間10銭で10時間働いた。プランテーションよりいいんですよ。この3か月の季節仕事を1年だけやって、それでつぎの年に日本人の店で働きはじめた。

店で働いて、英語を覚えなあかんとおもう夜学校へ行った。また早稲田大学の(中等)講義録を

注文して勉強した。ただ夜学校に行っても、なかなか頭に入らんですよ、もう年をとっているから。チャーチの牧師が先生で、テーブルを囲んで、クラスがだいたい7~8人くらい。リーダーの1巻からはじめて4巻までいった。ただ読み方を習うだけのもんですよ。それで、英語の手紙なんか、よう書かんのですよ。

働いて食べないかんのだから。いまの子供は学校に出てるから、いっしょうけんめいに勉強ができる。自分は働いて食べて、国にも(金)を送らないかんのです。

あこの夜学校には、^{ヤマトンチュ}大和人やら^{ウチナンチュ}沖縄人やら、なんやかや集まってるですね、みんな独身もんですよ。それで、食べ物は飯屋に行つて。飯屋も安いもんですよ。朝はコーヒー・ショップの方に行つて、ブレッドが2切れですね、コーヒーを飲んで、それからケーキが1切れですね、それで5銭。朝はこれでいいんですよ。昼は^{テンセントメン}十銭飯いうてですね、10銭です。これは、ごはんがある、おつゆがある、まあ、刺身なら刺身、魚なら魚がついて、それにつけものがついている。10銭でごはんは飯びつですね、自分が食べたいだけ食べられる。これで昼晩はすませられる。それで、25銭あったら、朝晩〔1日の食事〕がすませられるですよ。十銭飯屋があっちにもこっちにも、いっぱいあるんですよ。1円のチケットを買ったら11枚くれよったですよ。

そのチケットをもって朝晩に飯屋に行つて、食べて。そしてホノルルのこういう家〔自分がいま住んでいるような家〕を^{ワン}1ルーム借りてですね、独身もんが3人も4人もザコ寝をして、そして仕事に行きよったですよ。

ああ、ことば、ことば〔いらだたしげに〕。いまは(沖縄人も大和人も)同じように学校を出るでしょう。そうすると、おたがいに次第次第になにもかも分かつてきて、友だちにもなる。わしらのころには、内地の人でも分からん人がおったですね。上野という名前の人で、夜学校も一緒に出た人です。その人は(勉強が)あまりできないんですよ。それだから、わしのとなりにならんで座っていた。親の呼びよせで来て、漬物屋をやっていた。

まあ、口は災いのもと、というのか。「沖縄の

人はくさいよ。すぐ分かるよ」と、わしにいうんですよ。「そうじゃないんだろう。人間は、体質であってね。くさいのもおる。においがするのもおる。汗をかいたら、みんなくさいよ」というとね、「ノー、そうじゃないよ、違うよ」と、こういいよったですよ。まあ、「そうかな」といって、その場はそのままにしておいたですよ。

あるとき先生が「あんたはどこの県か」、「あんたはどこの県か」と順々に問うていったんですよ。そして、わしが「沖縄県」いうたんですね、毎日、わしのとんで夜学校に出てたんですからね、翌日からもう学校に来ないのよ。わしにむかって「沖縄の人、くさいよ、くさいよ」いってたから。いらんことをいうからですよ。どこにどういいう人がいるか分からんのに。あのころは夜学校に出るのも、沖縄県の人はずくなかったですよ。生活は苦しいし、いい仕事もなかったから。

しかし、いまごろはそうじゃないです。いまごろは、もう同じですね。^{ウチナンチュ}沖縄人とかなんとか(という区別)はもうないんです。みんなが同じ学校を出て、同じようにできるんだから。それでいまでは(沖縄人と大和人とのあいだで)婿とり、嫁とりなんかもできるんですね。

自分の話をすると、長女が結婚して行ったところは、山口県の者のところですよ。山口県の大島郡といってですね、たちのあんまりええ[良い]方^{ウチナンチュ}じゃないですよ。それでも、結婚したときに、^{ウチナンチュ}沖縄人いうて、バカにしよったです。それだから、酔うたときに「^{ウチナンチュ}沖縄人いうてからに、あまりバカにしなさんなよ」と、わしはいってやったんですよ。「^{ウチナンチュ}沖縄人、いうても、ピンからキリまであります」いうてな。「沖縄県でも首里の人いうたら、かなりええ家があるですよ。沖縄県の永山家いうたら、首里でも立派なサムライよ。ハワイに来たから、まあ、こうなったけど……」。それからもう、わしらのところにはなにもあまりいわんですよ。あとは「永山さん、永山さん」いって(慕ってきた)。

そしてむこうの娘が結婚するときも、結婚式でむこうの家を代表して、謝辞をいえる者がおらんのですよ。わしは頼まれて、むこうの家を代表して、謝辞をまあ、あたりまえにいったんですがね。なんにもできん者が、ああいうふうなんです、い

ばるんですよ。なんにも分からん者が、^{ウチナンチュ}沖縄人いうて、ああいうふうにはバカにするんです。^{ヤマトンチュ}大和人には、いうときにはピシャツといっってやったら、黙るんですよ。

5

盛光はホノルルに出てきてから3年後、1915年に灰田ドクターの薬局に仕事をみつける。これはいわば事務的・技術的な仕事であったから、盛光としては、はじめて肉体労働から開放されたことになる。それは盛光としても望むところであったので、盛光はこの仕事を1931年まで、16年間つづけることになる。この平坦な時期の思い出はすくない。時間があると、海に泳ぎにいったり、食べ物屋に集まって、なかまたちとながい雑談をする。そのようなことのくりかえしで、16年はすぎたという。それでも、思い出せばつぎのような事々が記憶として残っているという。

——1915年から灰田さんのうちに入って、1918年に結婚した。親が国〔沖縄〕で、(自分の結婚相手を)ウォッチ〔Watch〕して、もう会っとなですよ。その相手のおじさんがホノルルにおるもんですからね。永山がもらうつもりなら、永山と一緒にさしたらいい、とおじさんがいって、それで決まった。まあ、見合いもなにもないです。親が決めるんだから。親が結婚したわけですよ〔親が結婚したようなもんですよ〕。

薬局の仕事は、いつときは勉強せにやいかんですよ。薬の分量はですね、まちがったらたいへんですよ。ドクターがはじめにいったら〔指示したら〕すぐ慣れます。薬いうのは、みな毒とおもえ、とドクターがいうて。ドクターがみて分量するから、薬になるんじゃ、いうて。これをはじめにいわれたですよ。そういわれたら、いっしょうけんめい勉強せにやいかんですよ。その薬を、これがなんぼ、これがなんぼいうてですね、混ぜて、粉薬をつくったり、水薬をつくったりした。水薬は水を混ぜて、ちゃんとお飲むようにつくりよったですよ。

そしてまた、掛けとりにも出かけたりしました。いまなんかは保険があつたりして、ドクターは金がもらえるが、あのころなんかは、主人が1人で

働いていて、女〔妻〕に子どもができて、主人が病気でもしたら、もうお金がないんですよ。病気をしたらお金がない。それで掛け払いになったのがたくさんあります。

盛光は灰田ドクターの薬局に務めているときに、金をすこしずつ貯めて、事業に手をだしたり、株に手をだしたりしている。大もうけをたくさんんだのだ。

——ちょうど1920年、あの当時、8千ドルですよ、それだけ金がたまって、人がすすめるもんだから、パイナップルの事業をやったですよ。沖縄人の首里の3人がお金を出しあっていた。裏オアフのカイルア〔Kailua〕で、自分たちは金を出すだけで、人を使うて事業をやった。それで8千円ぐらい損したわ。やっぱり事業いうものは、自分が手を入れて、自分でやらないとダメだとおもったですね。自分がそこに行ってやればいいですけど、人に畑をまかせて、自分は日曜、日曜に行ってみるだけですからね。それではいい具合にはなりませんよ。働き人も働いたから、もっと金を払え、というし。

土地をリースしてですね。畑を耕して、パイナップルの種を植えるんですが、はじめは野っ原でしょう。馬を買って、馬を使って畑をつくるんだもん。はじめに大きな人数がいる。野っ原や山をひらくから。それに井戸を掘らにや、いかん。そうすると、ポンプも買う。家もつくらにやいかんでしょう。はじめに金がだいぶんいるんですよ、事業というものは。畑にパイナップルの種を植えて、2か年してパイナップルが出てきて、3か年目に出荷する。出荷するときに、パイナップルの相場が下がって、結局、自分が入れた資本と、出荷したパイナップルとをかけひきたら、8千ドル損したわけですよ。

その当時、男の子1人と女の子1人の子供がいたが、盛光はいままでの貯蓄をなくしただけで、あいかわらず灰田ドクターの医院に務めていたから、定期的な収入はあった。それで、たいしたヤケドをせずにすんだ。ついで盛光は株に手をだすが、そのばあいも、自分の生活にヒビが入らないように細心の注意をした。つまり、余分な蓄財の分だけ株を買うようにしたのである。「自分の財

産が6千円あったら、それを3つに分けてですね、2千円は自分の生活費、もうひとつの2千円は動かさずに貯えておいて、自分の老後の金。そして3つめの2千円は株。そうして株を買うたら、失敗しても自分は生活に困らんですよ。けっして、金を借りて、株を買うもんじゃないですよ」という考えをいつも保持した。

ところが、かれが灰田ドクターの医院に務めている途中に、灰田ドクターが亡くなる。

「勝彦のお父さんがここで亡くなってですね、そのオフィスに、ドクター三田村というドクターが移ってきたわけですよ。灰田勝彦のお父さんが亡くなったから、勝彦らはお母さんと一緒に日本へ帰っていった。奥さんの兄弟が東京にいるから、ということで。わしはドクター三田村がそのままおってくれ、というので、そのまま薬局室におったわけですよ」。そして盛光は、1931年にドクター三田村がオフィスをハワイ島のヒロに移すまで、そこに務めた。

その後、盛光はビール会社に務めた。それから第二次大戦があったが、大戦中も別に苦労なくビール会社に務めていた。

——ラジオでもって、日本軍がパール・ハーバーをなにしとる、いうてですね、戦争とわかった。やっぱり日本人だから、ほとんど日本が勝つとおもうておったですね。日本の方が勝つとおもうて信じておった。口では日本が悪いとかなんとかいってたが、心では日本が勝ってくれたらいいとおもっていた。まさか日本が負けるとはおもわなかったよ。

ビール会社は働き人は主に日本人だった。日本人はアメリカ（大陸の方）にひっぱられるとかなんとか上の方はいったらいいですがね、ハワイはもういたるところ日本人だから、ここから日本人をひっぱっていったら、ハワイはなにをすることもできない、ということで、とうとう日本人はひっぱられなかった。仕事はもういっぱいですね。軍部の仕事やら、大工やら。

（気持としては）複雑ですね。子供ら、兵隊にいくでしょう。うちの長男も兵隊にとられていくし。うちは442連隊*じゃなくてですね、FBI。アメリカ（本土）へ行行って、ドイツの捕虜をウォッチしておったですよ。それからもずっと FBI で

働いている。

それで、終戦になったら、日本語が分かるというので、東京へ行ったですよ。そして東京の、つまりアカですよ、なにかの次郎という名前だったナ、沖縄出身の共産思想をもっとる……。久米次郎か亀次郎か、代議士になった県の人ですよ。その人をウオッチしよったですね。この長男は20なん年か兵隊におって、除隊になるまえにデトロイトで肝臓ガンで亡くなったですよ。死んでですね、いまパンチ・ボールに葬られている。その奥さんは、パール・シティのずっと上に新しい家を買って、そこにおるんですよ。子どもが2人おってですね。

＊ 盛光ら1世の子供たち、つまり2世たちは、アメリカ兵として第二次大戦に参加した。「442連隊」は1943年1月22日に結成されており、その構成員は日系アメリカ人という特色をもった連隊である。そして北イタリア戦線でドイツ軍とぶつかっている。「普通の米国民の二倍も働かないと、忠誠心を認められない」(川添堅風『移民百年の年輪』移民百年の年輪刊行会、1968年)という気持からか、おびたしい数の犠牲者を出したが、その勇敢さは当時の評判になったし、現在も日系人のあいだに語り伝えられている。442連隊に参加した比嘉太郎はいっている。「やがてわが隊は、敵機銃陣地をめがけて手榴弾と銃剣できょうこそ自分も最後だろうと覚悟を決め、突貫兵の一員として従った。われら日系兵は英語と日本語で喚声を挙げながら突撃した」(比嘉太郎『移民は生きる』日米時報社、1974年)。

第二次大戦から約20年後、1960年に盛光はアメリカ合衆国の市民権をとる。ときに71歳であった。アメリカが日本人に市民権を与えてくれたのは、自分たちの息子の代が志願兵として参戦したからだという、現在では常識になっている事柄を、盛光はあらためて強調した。

1918年の結婚から50年後、1968年に金婚式をした。——^ツ2ボーイ、^{スリー}3ガールができてですね、孫が15人。そのときはじめて、みんな家族が集まって。これ、次男の長男と長女〔写真をみせながら〕。これ3人、いま国外におるんですよ。これ、ロサンジェルス^スの学校行っとるんです。それから、長男がここ。わしがここ。これが長女ですね。長女はハズミン〔夫〕。それから、その長男がこれ。これ、マッキンレー(高校)を出るときに泳ぎが上手でですね、キャプテンかなにかやって、兵隊

になってもいつも泳ぎやってですね、たくさんトロフィーもろうて来とりますよ。これは長男のミセス〔妻〕ですね。東京で結婚したですよ。で長女のこれ孫。これとこれは長男の方。それから長女のこれはハズミンで、これが次女のハズミン。これが三女のハズミンですね。これが次男で、次男のワイフで。あと、こまいのみな15人の孫ですよ(以下、15人の孫についての説明がつづいた)。

金婚式からさらに10年たって、現在は年をとり「ようけい食べられんし、野菜ものばかり食べて」日々をくらしているという。

※

うが
拝でなかしや^{なきじん}今帰仁の城

草に鳴く虫ぬ声んかりて

〔鳴く虫の声も枯れて、か〕

拝でなかしや廃藩の武士

笠に顔かくち〔隠し〕馬子すんち

この歌は食堂の紙ナプキンに走り書きされているものである。廃藩の悲劇を私に語ってくれた沖縄出身の一人の老婆が、ホノルル市スクール通りに面した三流のレストランのかたすみで書いてくれたものである。廃藩の武士の子、永山盛光の生涯について書きおえるにあたって、紙ナプキンからの走り書きをここに書き写しておく。かれをハワイに行かしめ、ハワイにその生涯を送らせることになったのは、まさに廃藩置県(琉球国滅亡)を契機としていたからである。

この歌をレストランの暗がりを書いてくれた老婆は、ラーメンをすすりながら炎のような感情をたぎらせて、亡国の悲しみを私に語ってくれた。だがこの老婆は、永山のことばでいえば「^{イナカンチュ}田舎人」である。家禄没収という廃藩の悲劇をものにうけた永山の感情は、その生涯と同じように、淡々としたものであった。かれの目はそのことよりも沖縄差別にむけられている。だが実際は、廃藩と沖縄差別は、その本源において強く関連している。しかしながら、かれは沖縄差別の本源にまで問を深めようとはしなかった。そしてかれは、自分の与えられた条件下で石橋をたたきながら、平坦な道を90歳まであゆんできた。これもひとつの生き方といえよう。